

都市医師会長からの抱負

3期目を迎えて

札幌市医師会会長

松家 治道



本年6月札幌市医師会長に選任され、3期目を迎えることとなりました。これまで4年間なんとか職を全うできましたのも、北海道医師会をはじめ、多くの関係者の方々のご支援の賜物と存じます。改めて深く感謝申し上げます。

これまで「機能の連携と心の連帯」を掲げ、地域医療の発展のため努力して参りましたが、もう2年会長職を務めて参りたいと存じます。ご支援どうぞよろしくお願いいたします。

今世界では、米国の政治的リスク、北朝鮮リスク、イスラム過激派によるスペイン、フィリピンなどへのテロ拡大といったさまざまなリスクを抱え、非常に不安定となっております。

また国内においても、安倍政権の支持率の低下や民進党の分裂の危機などにより、日本の政局も混迷状態に陥りつつあり、政策運営の漂流が懸念されております。

このように不安定な状況下にあります。私たちは医療を生業とするものとして、国民、市民に良質の医療を提供し、その安心安全のために寄与し、地域医療の確保維持に努めていきたいと思います。

昨年末に地域医療構想が作成されましたが、新たに作成される地域医療計画のもと、この構想に沿った医療体制の構築が求められております。その道は容易ではないと思われませんが、北海道医師会のご指導の下、その達成に向け努力して参ります。

また地域医療構想とともに重要なのは、地域包括ケアシステムの構築です。その中心となる在宅医療を推進に、これまで以上に努力して参りたいと存じます。

また昨今続く自然災害に対応するため、災害時医療体制の再構築、および、社会的状況の変化により不安定となりつつある救急医療体制の堅持に努めて参ります。

医療界を取り巻く状況は厳しくなる一方ですが、会員の相互扶助および福祉向上を図るとともに、厚生行政に協力し、市民に安全安心を提供し、市民に信頼され、市民が安寧に暮らせる街作りに寄与するべく、活動して参りたいと存じます。

私たち札幌市医師会は、これからも道医および各都市医師会と足並みをそろえて活動して参りますので、よろしくご指導お願いいたします。

医師会長再任にあたり

石狩医師会会長

立石 圭太



今年6月の会員総会・理事会で石狩医師会長に再任されました。副会長をはじめとして、すべての役員と協力し、次の2年間を務めていきたいと思っております。

平成27年からの1期目を振り返ると、平成27年は、北海道で地域医療構想の策定が始まり、保健所をはじめとした行政の会議が増加しました。ただ、協議をする場というより、行政が行いたいことを説明する会といった印象を受けました。

先日、近隣医師会の若手医師との懇談に誘われる機会がありました。自分がこの地域でクリニックを開業した頃と同じ年代でした。彼らがどのような事柄に関心を持っているのだろうかと思いましたが、各々、在宅医療の問題など自分たちの地域で起きていることを話し合い、自分たちができることを真剣に話をしていた、とてもうれしく感じました。そして、実際の現場を見ていない行政側に物足りなさを感じる点は、世代や場所が違って共感するものでありました。

地域のことは、その地域で決めることは大事なことと思いますが、その「地域」とは、行政単位の境界線や保健所の管轄区域でもなく、医療の地域は、地域住民の受診範囲が地域の基準になると思います。そして、その地域の範囲は、必要とする医療の内容により大きくなったり、小さくなったりもします。地域包括ケアシステムの構築が当地域でも大きな課題とはなっておりますが、一住民の関わりを持つ「地域」をきちんと考えていかないと、住民が必要とする地域包括ケアシステムとはかけ離れていく気がいたします。

現在、本会の会員数は63名、中央ブロックでは一番小さな医師会です。次の2年間、この地域の医療を支えるために、本会会員の皆様、そして、中央ブロック会、北海道医師会会員の皆様には、さらなるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

人口減少社会での医師会運営

小樽市医師会会長

阿久津光之



平成29年6月2日に小樽市医師会では第148回の定時総会が行われ、浅学非才ではありますが会長職2期目を引き受けることになりました。

執行部では副会長職の近藤真章先生と大庭久貴先生が退任されたことにより、小樽市医師会の副会長職は柿木滋夫先生と鈴木敏夫先生が新任され、新たな執行部での運営となりました。

さて、小樽市の人口は平成29年5月には12万人を切り、7月現在で11万9,611人となっております。このようにパイがどんどん縮小化されていく人口減少社会の状況下において、小樽市医師会が継続的にやっている事業内容を精査し、その中で「選択と集中」といった考え方での対応が必要になってきているのではと思っております。

医師会にとって大きな課題の一つは、夜間急病センターの運営事業の見直しや土曜日と日曜日の当番医制度のあり方など、救急体制の問題です。他に医師会立看護学校の運営、介護保険の審査会、そして産業保健センターの運営事業などがあります。すべてにおいて人的資源の減少に伴う根源的な問題があり、これから5年先10年先を見越しての体制作りが必要と考えておりますし、これからの医師会活動にとりまして、今以上に公的病院との地域医療連携体制作りの重要性を感じております。

この任期中には、現在抱えているいくつかの問題に対して、ある程度の方向性を決めていかなければならないと考えております。どれもが難題ですが、幸いなことに小樽市医師会には有能な理事が多く在籍しており、それぞれが小樽市や医師会、さらに医療に対する熱い思いを持っており、毎月の理事会の中で活発に論議がされることが多く、私の役割は意見を集約して、方向性を決め、最終責任を持って決断することです。

これからもこの姿勢を貫きながら、人口減少問題を抱える医師会運営に携わっていきたくと思っております。

4期目に向けて

羊蹄医師会会長

皆川 幸範



8月26日、小生同期の北大医学部53期の卒業40周年同期会が、札幌パークホテルで行われました。半分の出席でしたが、5年前に会っていた顔、数十年ぶりで名前が思い出せない顔、思えば随分時が経ったものです。毎回誰かが講演することになっているのですが、今回は北大医学部第一内科教授の西村正治くんの担当でした。その記念講演では、日本の臨床研究の世界への発表が、ピーク時の三分の一以下に減少しているとのことでした。大学で臨床研究する人が集まらないこと、また海外への留学生も減少し、今では中国韓国に及ばないようです。専門のCOPDの話でしたが、印象に残ったのは、彼は学生に「大学授業知識の半分は真実ではないが、どの半分が正しくないかは分からない」と話していることでした。確かに学生時代に習ったことが当時は一般的だったことが、今現在では正しくないことが多々あるものです。二人に一人が癌になる時代、現役を続ける限り肝に銘じて研鑽せねばと思いました。近況を報告し合って終わりましたが、定年後の延長や職場の変更、地域で現役を続ける人、まったく医者をやめてカナダに移住した人や癌治療中の人など、人生いろいろでした。地方で医者は減少しているが大学でも人材が不足しており、診療と研究を頑張る臨床医をどうわれわれがサポートしていくか課題のようです。

羊蹄医師会は、開業の先生以外では厚生病院の若手医師の参加が欠かせません。地域に根差した医療を目指した彼らの参加を歓迎するとともに、彼らの将来に向けた研鑽のサポートとしてどのようなものがあるか、医師会として考えなければと思っております。

来年は私ども羊蹄医師会が後志ブロック医師大会の担当になっており、今は成功に向けて準備しているところでもあります。

微力ながら当医師会の発展に僅かでも寄与したいと思っておりますので、会員諸先生のご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

苫小牧市医師会長になって

苫小牧市医師会会長

沖 一郎



平成19年4月に医師会長になってから早11年の月日が経ってしまいました。アツという間の11年でした。毎回毎回次々と課題や難題が起こり、それに対処しているうちの11年でした。苫小牧市医師会館の改築、苫小牧市夜間急病センターの新築運用、東日本大震災に苫小牧市医師会JMATの派遣、一般社団法人への移行、医師会管内の医療連携問題、麻酔医問題、道立病院の閉鎖と新たな呼吸器クリニックの設立、などなど、いろいろと思い出されます。

苫小牧市医師会は他の医師会と多少異なり、もう一つの財団法人を持っております。この財団は一般財団法人ですが、医師会活動で直接できない・できにくいさまざまな事業、活動を行っております。一般住民健診、事業所健診、各種人間ドックなどの予防医学事業や、産業医活動に対するバックアップ、ストレスチェックの実施とハイリスク者への指導、高度特殊健診活動など市民住民や企業からの要望に、常に応えられるようにしています。道立病院の代わりに呼吸器クリニックの運営、夜間休日急病センターの設置運営などを行っており、苫小牧市医師会活動の片翼を担っております。

昨年苫小牧市医師会管内1市4町(苫小牧市、白老町、安平町、厚真町、鶴川町)の地域包括ケアシステムの運用を目的にして、医師会館内に事業団訪問看護ステーション、苫小牧歯科医師会、苫小牧薬剤師会も入っていただきました。

医療と介護の連携が地域包括ケアシステムの中心になるべく、苫小牧市と連携し訪問医療、訪問歯科医療、訪問薬剤指導などの医療と介護相談、介護施設入所など、訪問看護と医療側のさらなる連携を目指して、医師会館内にとまこまい医療介護連携センターを開設しました。全てのサービスのワンストップ化を目指したものです。この事業も場所は医師会館、運営は財団法人保健センターが担っております。このように、苫小牧市医師会の運営は常に社団法人と財団法人の二つが一体となっております。

看護師養成事業は、苫小牧看護学校の准看護学科を来年度廃止し、看護学科のみで運営していきませんが、管内の王子病院附属看護学校とさまざまな分野で協力して、この管内の看護師の供給に関してしっかりと責任を果たしていきたいと思っています。

最後に、1市4町との自治体との連携や、西胆振、室蘭市、日高医師会との医師会連携を通して、さまざまな問題に会員一同、役員一同と力を合わせていきたいと思っています。

日高医師会長5期目を迎えて

日高医師会会長

小松 幹志



今年の日高医師会総会で、会長5期目をお受けすることになりました。日高管内の医療事情は、医師数の減少、病棟閉鎖ならびに閉院等、ますます深刻な状況となっております。また2015年1月に起きた高波による土砂流出でJR日高線が不通になってから2年半が過ぎましたが、線路の復旧はおろか、むしろ鉄道の廃止の危機に瀕しています。実際、日高管内から苫小牧・札幌方面の医療機関への通院患者は多く、本人ならびに家族の負担が大きくなっております(通学も同様ですが)。われわれ医師会員も早期復旧を心待ちにしていますが、直近の問題として医療体制の確保ならびに維持が必要とされております。

来たる「2025年問題」に対しましては、病床再編等、日高圏域の目指すべき医療体制の実現に向けて、課題や役割分担など、各医療機関との認識の共有を図るべく意見交換の場を設けていきたいと思っております。このためには病病連携・病診連携はもちろんですが、自治体・介護施設等とともに医療・介護・福祉の連携推進を図り、地域医療構想の具体的展開や地域包括ケアシステムの構築に資するよう、管内のネットワークを強化していく必要があります。今後各医療機関間の垣根を取り払い、さらに行政サイドとも協議の場を設け、積極的に働きかけ実現化に向けて努力していきたいと思っております。

先日105歳で亡くなられた日野原重明先生の言葉の中に「人が手を広げて一人で作れる円は小さな円。みんなで手をつないで作れば大きな円になります。人は大きな円(ラウンド)の弧(アーク)であれ」というのがありました。まさに現在のこの地域の医療体制だけでなく、将来に向けて必要な資質ではないかと考えております。この言葉を胸に、医師会長5期目の集大成として、日高の医療・介護・福祉をより充実させることにより、地域住民の皆様が安心して生活できるように尽力して参りたいと思っております。

「地域包括ケアシステムの構築」と 「あらためて新たな街づくり」

旭川市医師会会長

山下 裕久



4期目に入って直後の7月2日に、第51回全道ドクターズゴルフ大会を旭川で開催し、136名の参加を得て盛會に終わることができました。全道各地から参加いただいた諸先生、道医を含む関係の方々、実行委員の方々に心から感謝しています。

さて、今期最大の課題は「地域包括ケアシステムの構築」です。当医師会では、以前から「切れ目のない医療」「在宅医療の推進」「医療・介護の連携」を掲げてきましたが、「地域包括ケア」のキャッチフレーズは「住み慣れた街でいつまでも」であり、従前以上に、地域住民の衣食住・福祉・人間関係を含めた総合的な「街づくり」の観点が必要になります。当市では、介護高齢課担当で会議が始まりました。医療・介護が要であることは言うまでもありませんが、「街づくり」はより広汎であり、私共関係者の活動に加え、地域住民のこれまで以上の意識の向上とやる気・能力の引き出し・実際の参加が要点になると思います。医師会としては、この「地域包括ケアシステム」の中での医療の立ち位置を再考し、会員の動きやすい・働きやすい環境創りを目指したいと考えています。「たいせつ安心 i 医療ネット」は登録患者数3万1千人を超え、患者情報をつなげる病診連携のツールとして、来年5周年を迎えます。「地域包括ケア」推進を含めて、訪問看護ステーションにも枠を広げます。より多くの医療・関連機関に活用いただきたいと思っています。

先日、道北ブロック会議が名寄市で開催されました。国道40号線沿いの街並みに地方の疲弊を感じましたが、名寄市立病院と士別市立病院では主要機能を分担し、士別市立病院は療養病床への転換で増収との嬉しいお話をお聞きしました。医療機関の協力の大切さを強く思ったことでした。

道北の要の医師会として、地域に何ができるか、何ができないか、何をしなければならぬか。当会会員の能力と助力に希望を持って、気を引き締めて4期目に向かいます。

3期目にむけて

根室市外三郡医師会会長

杉木 博幸



不肖私が3期目の会長職を務めさせていただくこととなりました。これまでお支えいただきました皆様に心から感謝を申しあげますとともに、今後も変わらぬご支援ご指導いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、当地域の医師不足・医療従事者不足の深刻さは一向に改善の兆しがありません。限られたメンバーで有効な医療を展開し、また地域包括ケアシステムを構築していくために、公的医療機関・開業医間の連携、そして行政を含めた多職種間の連携が重要であることは言うまでもありません。根室市では定期開催している医療連携会や多職種連携協議会などを通じ、医師同士や医療機関間、あるいは多職種間の顔の見える良好な関係が年々構築され、一丸となって患者の治療にあたるという意識が成就されつつあります。しかしながら、若年人口の減少や都会への人口流出の波は非常に厳しく、開業医の高齢化も含め、いつ地方医療が崩壊してもおかしくない状況です。

こうした厳しい状況の中、今年4月から市立根室病院で経産婦の分娩が再開されました。実に10年半ぶりの再開です。市民の長年の悲願であっただけに、ご尽力された産科医師をはじめ、関係者の皆様に心から敬意を表する次第であります。人口減に悩む当地域の少子化対策としても期待され、出生率の向上を願うものであります。

日ロ共同経済活動における「医療」には、遠隔医療等が検討されていると聞いていますが、今後も市立根室病院、町立中標津病院でのロシア人患者の診療は継続されていくものと考えます。当医師会として協力できることがあれば、事業として取り組んで参る所存であります。

今後も当医師会としましては、会員相互の連携を密に地域医療の維持・充実に努めて参りますとともに、将来の医療従事者確保対策として、青少年への医療体験事業などを実施して参りたいと存じます。